

5. 地域振興としての「安比高原開発」の現状と今後の課題

安代営林署

○小山内一彦

阿南一義

平山博文

1. はじめに

八幡平地域総合森林レクリエーション・エリアの安比地区で、安比高原開発が具体的に開始されたのは、昭和55年10月の第3セクターの安比総合開発株式会社設立である。

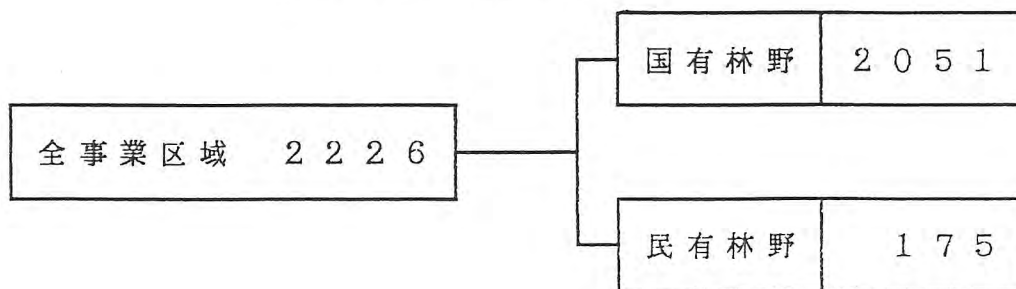
この安比高原開発の進展が、典型的な過疎の山村であった、地元安代町に与えたインパクトは、極めて大きいものであった。



安比スキー場

森林空間利用の一つの典型である、安比高原開発の着手から10年経過した現状を、地域振興の面から分析し、今後の課題を検討したので報告する。

安比地区の土地の概況

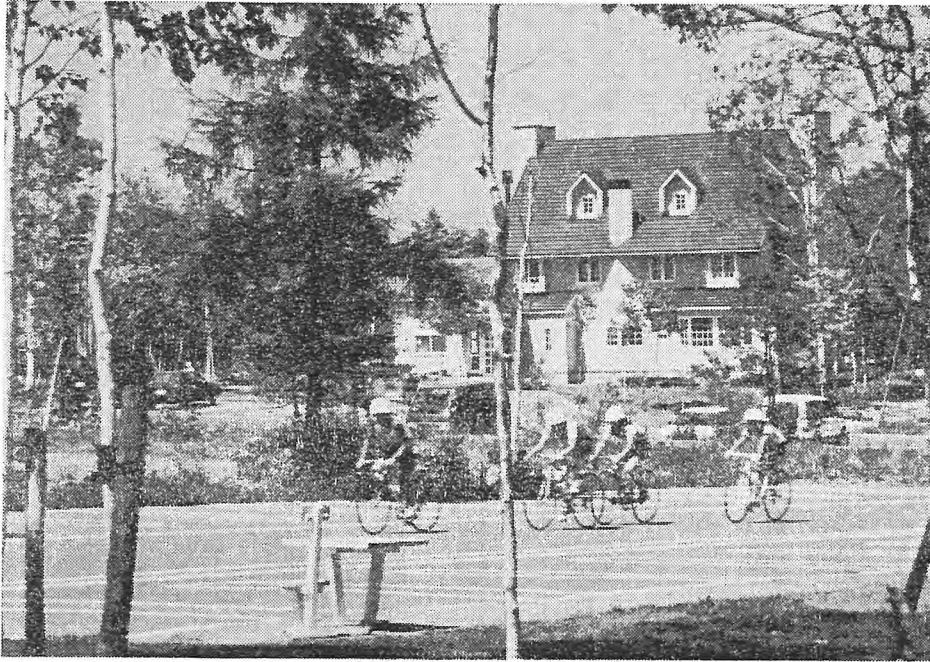


凡例：単位はH a

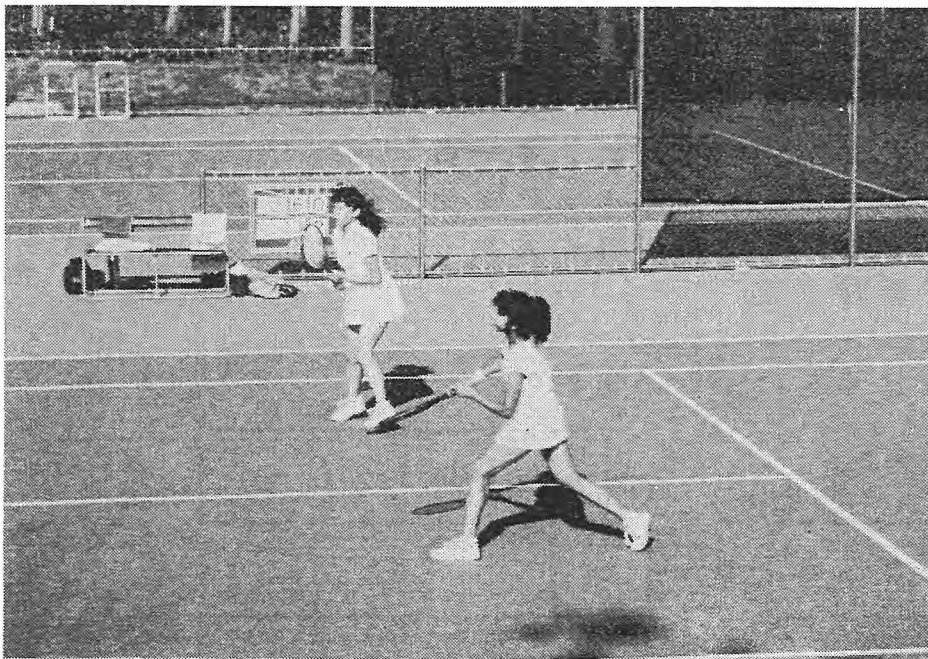
2. 安比高原開発の現状

安比高原は、岩手県北西部の八幡平に隣接し、標高1,300～1,500mの山々から連なる高原で、四季を通じて自然本来の美しさ、雄大さを感じさせる自然の中にある。

この美しく、雄大な自然の中で進められてきた高原開発は、昭和56年12月に、安比高原スキー場がオープンして以来、着々と施設が整備されてきました。



ペンション

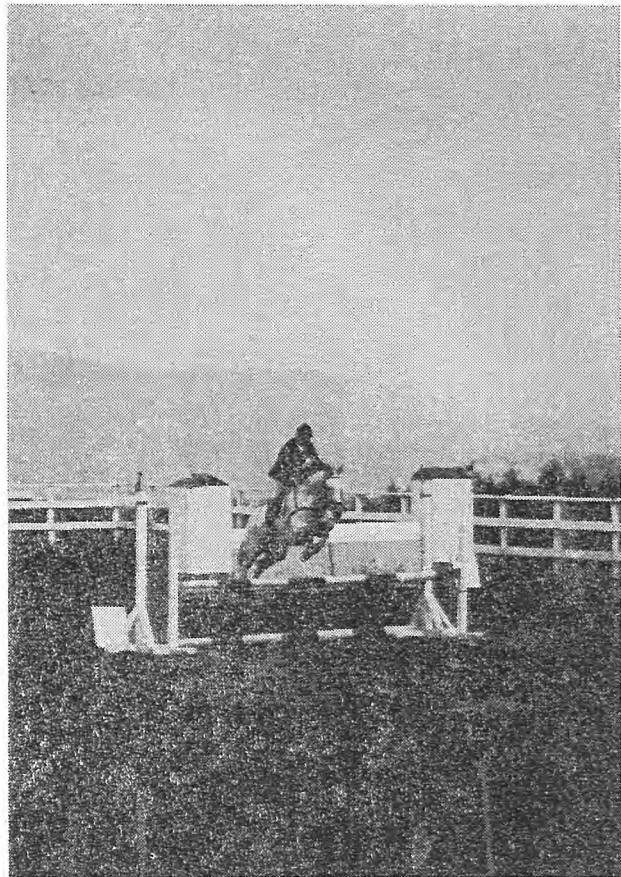


テニス場

現在、スキー場施設は、リフト27基、ゴンドラ1基、ゲレンデ23コースとなっており、北東北では、もともとトレンドなスキー場で、ある。

その他に、スノーモービルランドや、付帯施設として、ホテル、ペンション、別荘地、牧場がある。

また、グリーンシーズンは、乗馬テニス、その他、数々のイベントが実施されています。



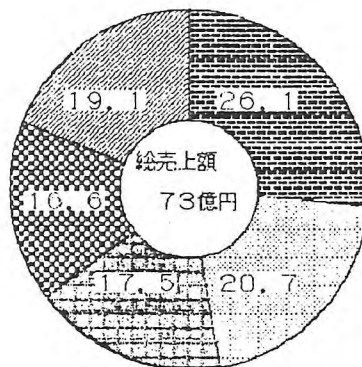
乗馬

2, 安比高原開発の経済波及効果

安比高原開発が、地元安代町に与えた、経済波及効果についての、分析結果を説明します。

はじめに、安比高原開発の位置づけを、安代町における、昭和62年度の観光売上額内訳を、観光客一人当り消費額内訳で分折してみた。

昭和62年度 安代町観光売上額内訳(%)



- スポーツ施設関係
- 宿泊
- 土産品等物品販売
- 宴会・飲食
- その他

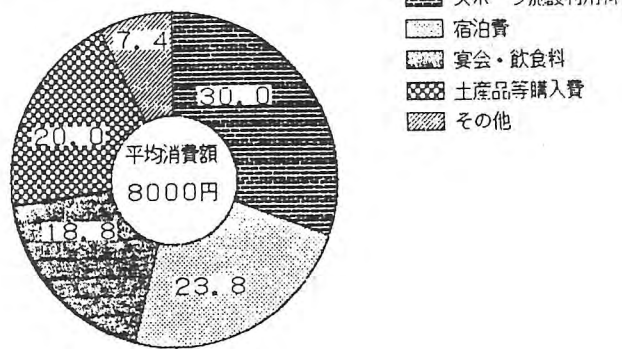
売上額、消費額ともに、スポーツ

関係が大きい位置を占めており、これに宿泊、土産品等の物品販売の割合を考慮すると、町経済に与えた効果は、絶大であったといえる。このことは、安代町の年度別町税収入額を見ると、明かである。

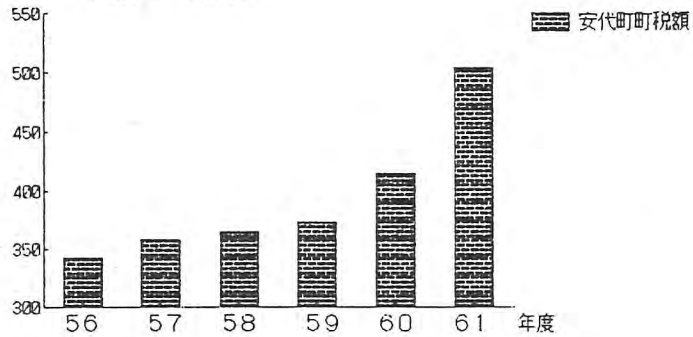
安比高原スキー場がオープンした、昭和56年度は3億4千2百万円だったものが、昭和61年度には、5億5百万円とな

り、 68%の増加をみている

昭和62年度 観光客一人当り消費額内訳(%)



百万円 年度別 町税収入額

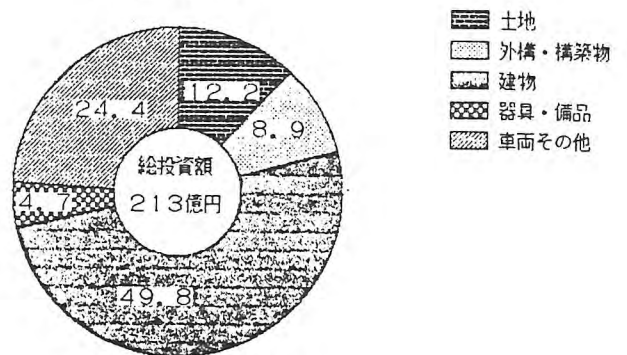


次に、観光産業への、建設等の投資額から安比高原開発の位置づけを、見てみたいと思う。

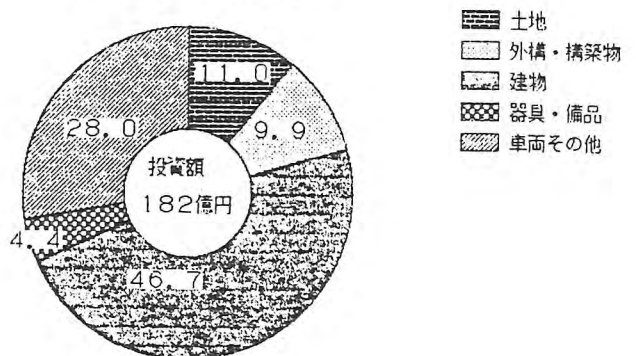
このグラフは、過去3ケ年・昭和61年から63年の安代町全体の観光産業投資額の累計で、この中の安比関係観光産業投資額を引き出してみたものである。

これでわかるのは、安比関係観光産業投資額は、182億円と、実に9割以上を、占めていることである。

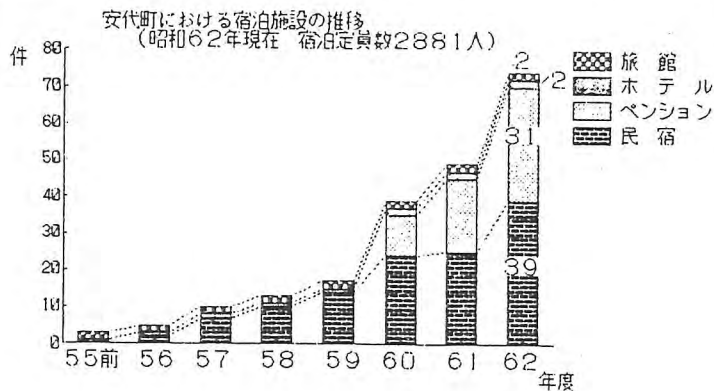
観光産業投資額 (%)



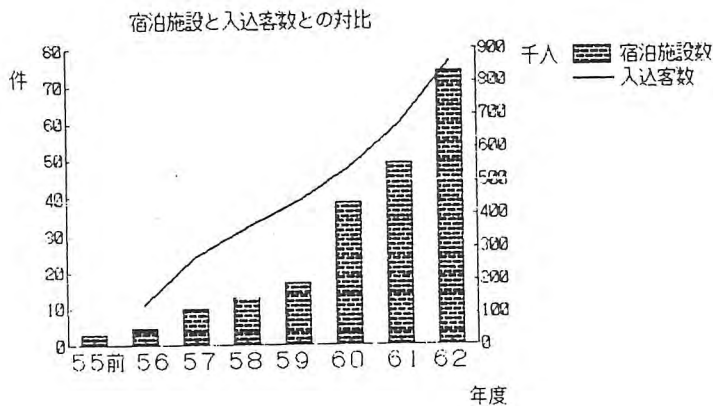
安比関係観光産業投資額 (%)



次に、宿泊施設と入込者数の推移を、見て行くことにします。
 安代町の宿泊施設としては、昭和55年以前は、新町地区に、2軒の旅館があったただけだったが、安比高原開発が着手されてから、年々増加し、昭和62年度には74軒、63年度はさらに13軒増加し、87軒となり平成元年度に入って、数件増え、宿泊収容数は4,139名となっている。



このように宿泊施設が増加し、安比高原開発の諸施設も充実していくことにより、入込者数も年々増加し、昭和62年度には、86万人昭和63年度には、さらに増加し、107万人の入込者数となった。

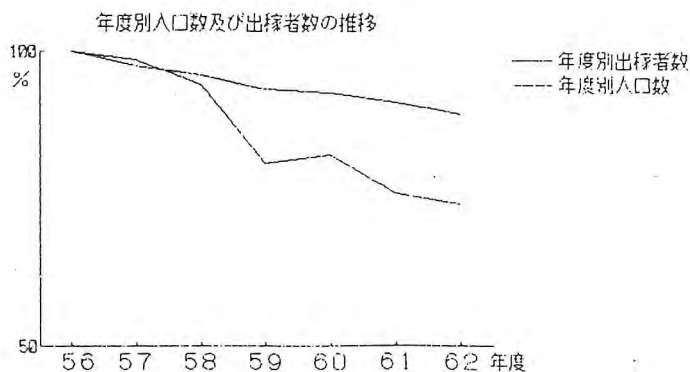


しかし、この宿泊施設と入込者数の増加の実状は、冬季スキーシーズンともなると、宿泊収容能力から、定員オーバーとなり、安代町と隣接する八幡平温泉郷、秋田県湯瀬温泉地区等の、宿泊施設を利用しなければならないとなっている。

安比高原開発が、安代町の活性化に与えたインパクトは大きく、連鎖反応を起こしているかに見受けられる。

この例を、人口の推移と出稼者数
 安比高原開発に伴う周辺産業の動向、第三セクターと地元との関わりで、みていくことにします。

人口の推移と出稼者数ですが、安

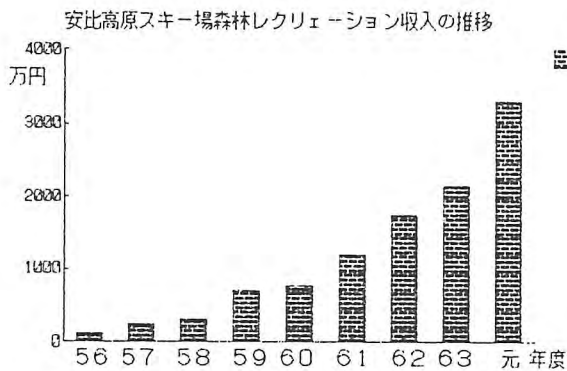


代町も、過疎に歯止めがかかったというところまでは、いっていない。

しかし、岩手県で昭和51年度に、500人以上の出稼ぎ互助会に加入していた市町村の10市町村の対比で、一番減少率の大きいのが安代町である。

また、人口の減少率も、周辺市町村と比較すると、花輪鉦山の倒産というような事例があるにも関わらず、低い値となっている。このことは、安比高原開発着手以降、周辺産業において、次々と創業、開発が行われている動きで、裏付けられる。昭和58年以後、17件もの事業が開始されている。

安代町は、これらの動きを、町おこし戦略とし、「第三セクターと地元との関わり」を、安比高原開発の、一つの起爆剤としている。

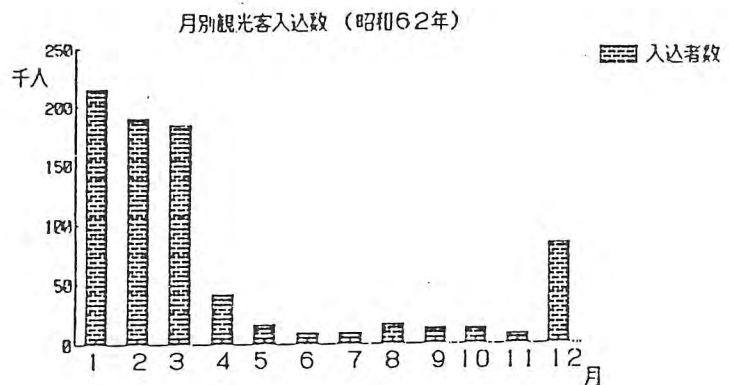


安代営林署の安比高原開発関係の収入は、昭和56年度当初を100としてみると、平成元年度は、約29倍弱で、金額は約3千2百万円であり、これは、安比高原の営業実績とともに、着実に増加していることを示している。

3, 今後の課題

これまでみてきたように、安代町の観光客入込客数は、安比高原開発着手以降、急速な伸びを示しており、地域に対する経済的な波及効果も、大きなものがある。しかし、現状をよくみると、いくつかの問題点がある。

一つは、入込の特性からみた課題です。安代町の観光開発は、安比高原開発イコールスキー場開発からスタートした、という経緯から、当然のことではあります。年間の観光客入込数のうち、



スキー客がほぼ9割を占め、12月から3月までの4カ月に、85%の客が集中している。ペンション、民宿等の経営安定を図るうえからも、冬季以外のシーズン、すなわち、グリーンシーズンの入込みをふやすことが、当面必要である。

このため、たとえば「テンス・乗馬等のグリーン・シーズンの活動の充実」「キャンプ・山歩き・自然観察などの自然と親しむ活動の充実」「定期的なイベントの開催」「研修・セミナー等の開催」等の実現を考えている。さらに、安代町の観光客の特性として、県外客の割合が、比較的高いことがあげられる。

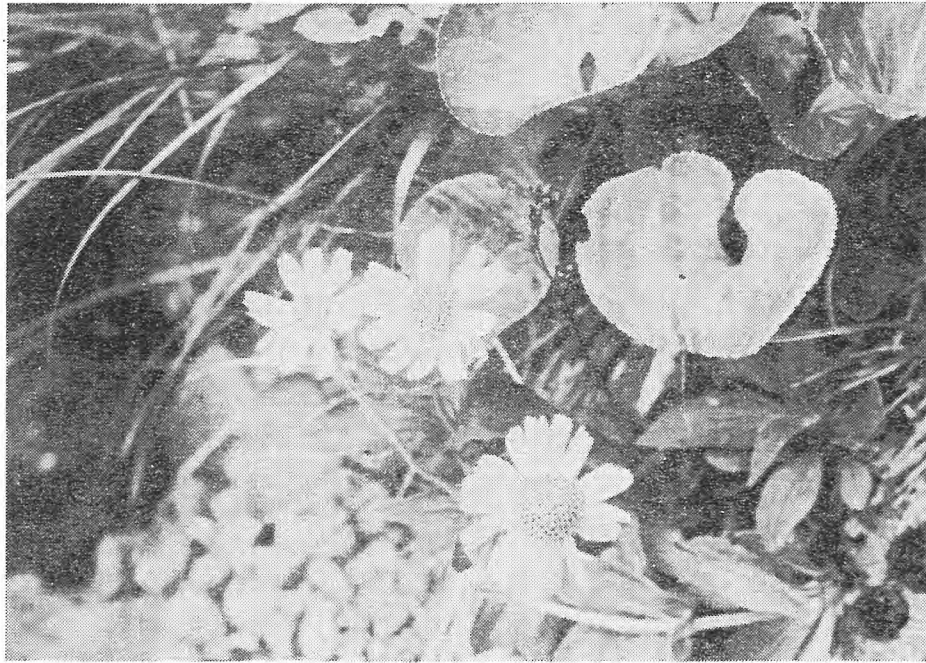
しかし、宿泊客はそれほど多くありません。これは、町内に、宿泊施設が少ないばかりではなく、本格的なリゾートをめざすうえからも、ペンション、民宿に加えて、多様な宿泊施設の一層の充実が、求められている。これに対しては、「今後本格的な普及が期待される、オートキャンプ場の整備」、「長期滞在に対応できる、キッチン付きのホテル等の整備」、「企業等の保養施設の誘致」、「特徴ある民宿や、ペンションの充実」等が考えられる。

二番目として、地元からの供給を増やすための体制づくりである。地元商店の観光売上は、約5億7千5百万円で、これは、観光産業が支払った原材料購入費の24%強にあたる。観光消費の地元波及を拡大するためには、この比率をさらに大きくする必要がある。このためには、観光産業と地元商店とが、連携をもち、地元での、リゾート・グッズの開発を考えなければならない。

三番目として、地元雇用の比率は、冬季は比較的高いが、夏場は、3割弱となっている。これは、常用者が少ないためで、常用比率を高めることが課題である。この点からも、さきにも触れた、オール・シーズン型の、観光地づくりが求められている。そして、常用者の比率を高めるためにも、技術を身につけた、質の高い労働力の提供も、大きな課題である。それには、「スキーのインストラクターなどの、ウィンタースポーツの指導者の養成」、「ホテルマンなどの、宿泊サービス業に従事する人の養成」、「森林インストラクター等の養成」、などが考えられます。

4, 考察

他の地域に比較すると、急成長し、順調に進んでいるかにみえる安比高原開発も、以上のような課題を、かかえているのは、否定できない。国有林としても、国民の多様な、森林に対する要望に応じていかななければならない。



それには、森林インストラクターとして活躍できる職員の養成、森林欲、森林教室、体験林業など、イベントの企画と実行をする必要がある。対外的には、安比高原開発のマスタープランによる、中の牧場、奥の牧場の施設の充実などを、第三セクターに働きかけていく必要がある。

